

つの役割であることは否定できないこと、そこから、一つの職業をもつた人間の成長を考える視点の必要性、更にそういう意味での職業的 identity をどう把えるかについて質された。これは、現在臨床心理学の領域で大きい問題になりつつある、clinical psychologist identity という一般的な問題とつながる、単に研究上の問題にとどまらない、心理学者の生活に直結する問題をふまえた質問であった。これに対し発表者としては、職業のかたちを一つの容器として考える、その容器の中に自分自身を中身として入れる、この容器と中身の交互作用の過程を吟味してゆきたいとの返答がなされたが、発表者自身、認めているように、この成長過程の研究グループが大半、未だ大学に属する者であること、その点で、プロの clinical psychologist としての意識が稀薄であること、そのために、どうしても、『自己実現』『自己の reality』といった、いわば抽象的なところにとどまらざるをえない限界があることが明らかにされた。関係スケールの研究については、上田から段階毎の記述の意味について意見が述べられた。即ち、高い段階の記述

が、カウンセリングにとどまらず、教育的観点からも、健康価値をはつきり出すこと、又それを単に高い価値の記述だけでなく、低い段階、即ち低い否定面から、健康なものが目標とされて次第に変化してゆく様相が記述されてゆくところに意義があるということであつた。発表者側からは、必ずしも価値ということを念頭において記述したものではないこと、研究者の体験を記述するものだけに、現在の高い段階の記述は仮のものであり、今後も変容する可能性が十分あるものであるとの点がつけ加えられた。

治療者集団の研究については、田中(東教育大)より、参考意見として、集団の成長過程を、更に集団の動きとして把え、いくつかの index に還元してゆくこと、たとえば、孤立、協力、分業、といったコースとして把えることが示された。発表者側としては、ソミオメトリー自身を専門にしていないだけに、こういつた学会の場で、新しい次元の異なるところからの観点を与えられることの大切さを生かしたいとのことであつた。

(村瀬孝雄、越智浩二郎)

9—3 臨 床

- 931 臨床面接におけるコミュニケーション**
大内 長子(国際キリスト教大学)
- 932 共感関係の教育心理学的研究(序報)**
高瀬 常男(京都大学)
大沢 春吉()
松坂 清俊()
○田畠 治()
- 933 教育心理劇の技法**
—one-person psychodrama と marketing の技法—
松村 康平(お茶の水女子大学)
- 934 教育的集団心理療法の試み(2)**
一とくに社会的適応異常児の場合
田中 熊次郎(東京教育大学)
教育相談研究所
- 936 精神病院における児童の処置—VI**
精神薄弱児の場合
○小松 教之(東北大学)

大友 昇(宮城県立光明養護学校)

部会の全体的特徴

参会者約80名。岡部ら(935)の取消しがあつたので、研究発表は五つであつた。これらは、大別すると2群になる。第1群は、教育臨床の基礎理論に関するもので、大内(931)の面接におけるコミュニケーションの研究、田畠ら(932)の共感関係の研究である。第2群は、教育技法や心理療法の実際にに関するもので、松村(933)の教育心理劇の研究、田中(934)の教育的集団心理療法の研究、および小松ら(936)の精神薄弱児の精神病院における処置についての研究である。

教育的臨床の分野において、理論と方法とは、相即不離といふべく、つねに相まつてすすめられねばならない。しかるに、研究者がひとりよがりになつてしまふと、独断の理論におちいつてしまつたり、民間療法まいの小手先技法に堕してしまつたりする。安易な立論は、つとめて諒め合わなければならぬ。本部会では、それぞれにすぐれた着想の研究が多く、討論も慎重であつた。しかし、にわかに完ぺきをのぞむことは無理であろうけれども、現在の水準にとどまることなく、さらに

教育心理学年報 第5集

展望を拡大し、サンプルを適切に選び、研究方法を工夫し、客観的資料にもとづく論証を重んずるという方向を考え合う必要があろう。教育的臨床の心理学的研究を一流の学術に高めるためには、何よりも精度が問題とされるのである。

討議の内容

研究発表が終ると、間髪を入れずに熱心な質疑応答が交わされた。大要以下の様であつた。

A コミュニケーションと共感関係

個人間に共感関係が成立してからコミュニケーションが行われるのか、あるいはその逆であるか。この点は、一つの研究問題であろう。大内が、田畠らの発表に対して、共感的でないとして除いた具体例について質問したのは、かような根本問題にふれていると考えられる。発表者は、一方的な自己表現のものは除いたと述べたが、一方的かどうかは、自由記述では客観的に論証できないであろう。そこで、発表者は、そのような表現も低い段階での共感といえるかも知れないので、なお検討してみたいと回答している。

岸田（徳島大）が、精薄児施設をとりあげた理由を質問したのは、低い段階での共感という問題に関連している。すなわち、発表者が、故正木教授以来の“どんな精薄児でもなんらかのふれあいはできる”という基本的態度を研究の前提にしていると答えたことは、意義深いといわねばならない。発表者たちは、そのような立場から、信楽における精薄児施設の教育的人間関係の推移を鮮明にしようと試みてきたという。たしかに発達のおくれている低いレベルでの資料と、発表者もいうように普通学級の資料とを比較研究することになれば、一層の発展が期待できよう。

B 心理劇と教育的集団心理療法

松村は、きわめて示唆に富んだ心理劇の技法を公表した。田中のは、心理劇をも組みこんだ集団心理療法の試みである。堀越（東邦大）は、田中の発表について三つの疑問を提出した。第1は、1回の治療時間である。田中は、幼児では40～50分、低学年児童で60～80分、高学年児童では80～90分と答えた。第2は、集団構成の手続である。田中は、インタークやインタークカンファレンスでのスクリーニングがあり、なお、状況に応じて個人的扱いと集団的扱いとを適宜に併用すると答えた。第三

は、効果判定の疑問である。田中は、家族・治療者などの意見や判定のほかに、担任教師の意見をも加えること、なお事情に応じてソシオメトリックテストの結果によると答えた。このような応答ではあるが、異質の問題児を集団的に扱うのであるから、定型化できないというのが本当であろう。高橋（神戸大）の質問はこの点に関連している。その一つは、登校拒否とか学校嫌いとかの用語の問題である。田中は、いわゆる学校恐怖症（School phobia）をもふくめて神経症的兆候を示すものを登校拒否症とよび、登校しているが学校教育の実際に嫌悪を示すものを単に学校嫌いとよぶのである。その二は異質の問題を持つ子どもたちが治療されていくのに、共通の心的メカニズムは何かという問題である。田中は、社会的（集団的）適応異常の根源は、共感の未発達であり、集団治療といつても、集団そのものが目的なのではなく、どこまでも個人間の相互的共感の成長がねらいである。たとえば、心理劇的技法などを採用するのも、つまりは抵抗の少ない半ば非現実の世界での相互作用の経験によって、現実適応への橋渡しをねらうのであるという。

C 精神病院における精薄児の処置

精神病院は、すでに集団管理の場である。おそらく精薄児たちは、その中では特殊扱いの少数集団となろう。松坂（京大）の質問はもつともである。これに対し、小松らは、現状では、児童専任のスタッフがないために若干の看護者などがあたつていること、病院独自の方針があつて、思うほどの集団心理療法が実施できないことなどを述べた。本間（京都府身障者センター）は、精薄児を他の問題児と同じ集団に組むことの疑問を提出したが、これは、発表者のいうように、むしろ相互作用を活発ならしめる観点から異質の方がよいであろう。児童病棟のない病院で、問題児童をいかに扱うかは、なお研究を要する。かような領域にも、教育心理学者が大いに関心を示すべき問題があると考えられる。

以上、30分という限られた時間内の討議としては、かなり実り豊かな内容であったといえよう。臨床が術語のやりとりの論議に傾き過ぎれば、本来の対象（患者）が忘れ去られることとなろう。この点、本部会の討論が、実際に即したものであつたことを喜びたい。

（田中熊次郎、田畠 治）